

ロマン主義時代の英国文学作品における子ども観と教育思想の再考

—ロックとルソーの二元的フレームワークの影響をめぐって—

池亀 直子

英国の教訓派作家と呼ばれるバーボールドやトリマーとコールリッジやワーズワースらロマン派詩人には子どもを主題とした作品が多く見られるが、両者の作品が体現する子ども観と教育思想はしばしばロックとルソーの教育思想を背景に置いた二項対立で理解される。だが実際は両者はともにルソーの「消極教育」の思想に対して否定的見解を持ち、国教会主導の宗教教育を実現するアンドリュー・ベルが提唱したマドラス・システムを支持しており、その教育思想を二元的な枠組みで考えることは困難である。社会変動の激しい時代において、両者はともに次世代の宗教教育、モラル教育に対して高い関心を抱いていた点で共通する。ただし同時代の道徳哲学の思想的影響からバーボールドとコールリッジの論争を分析した場合、バーボールドの教育思想には功利主義の観念連合論、コールリッジには美の本質性や生得性を論じる直観主義が見られる点では相違が存在する。

キーワード：バーボールド、コールリッジ、ロックとルソー、観念連合、直観

Reinterpreting the Dichotomy between British Didactic Authors and Romantic Poets: Thought on Dualistic Frameworks of Educational Ideas Shared Between Locke and Rousseau

IKEGAME Naoko

The purpose of this paper is to reinterpret the conflict between British didactic authors such as Barbauld and Trimmer, and the romantic poets such as Coleridge over children's education. It is not feasible to understand the relationship between didactic authors and the romantic poets in relation to dualistic frameworks of educational ideas shared between Locke and Rousseau. Didactic authors and the romantic poets were sceptical about Rousseau's 'negative education', and the romantic poets as well as contemporary educationalists, such as Trimmer, supported the Madras system advocated by Andrew Bell, which enabled the Church of England to take the lead in religious education. Although they had conflicting views on the interpretation of imagination in moral reasoning, they agreed that religious and moral education of children should be regarded as important in the changing era of nineteenth-century England. The difference between their opinions arose from their respective positions on religious and moral education of children. While Barbauld emphasized a focus on rational deduction with the association of ideas under the influence of the utilitarianism, Coleridge favoured intuitive imagination, by which one could recognize the essence of the good.

Keywords: A.L. Barbauld, S.T. Coleridge, Locke and Rousseau, Association, Intuition

はじめに

英国のロマン派詩人、コールリッジ (1772-1834) やワーズワース (1770-1850)、あるいはブレイク (1757-1827) には、子どもを主題とする作品が多く見られる。よく知られているのは『抒情詩集』(1798)に収められた「ルーシー詩篇」をはじめ、ワーズワースの「子どもは大人の父」の一節や、『序曲』(1805)での知識や徳を詰め込まれた「ドワーフ・マン」と森の声や川のせせらぎに耳を澄ませる「ウィナnderの少年」との対比、ブレイクの『無垢の歌』(1789)における「子羊」や「春」の牧歌的・抒情的情景などであろう。

一般にこうした作品に現れるロマン派の子ども観は、その根底にルソー (1712-1778) による教育書『エミール』(1762)の影響があり、同時代の教育に対する批判や子どもの社会化の否定を表現していると理解される。この理解の多くはバーボールド (1743-1825) やトリマー (1741-1810)、モア (1745-1833) ら、同時代の詩人・児童文学作家であり教育者でもあった、「教訓派」¹ と称される女性作家たちとの比較においてなされる。たとえばロマン派の芸術思想や人物についてまとめた『ロマン派時代事典』では、子どもを教化しようとする女性作家と子どもの想像力を守ろうとする男性詩人という「教化と想像力のダイコトミー (対立)」が指摘され、ラム (1775-1834) が1802年にコールリッジに宛てた「呪われたバーボールド一味」の手紙が紹介される²。

この手紙でラムは、バーボールドやトリマーらの本が書店の棚を独占して昔ながらのおとぎ話が追いやられてしまった状況を嘆き、彼女たちの本に載っている「くだらない退屈な知識」は、子どもを「知識の型」にはめ込むものだとしてコールリッジに訴える³。ラムがここで批判するのは、当時英国内でベストセラーとなり、海を越えた米国でも教科書として活用されたバーボールドの『子どものためのレッスン』(1778-9) や『子どものための散文に

よる賛美歌集』(1781)、あるいはトリマーによる『たとえ話』(1786)、雑誌『ファミリー・マガジン』(1788-89)などであろう。

教訓派作家に対するロマン派詩人の反発に、同時代の教育論、特に対比的に語られることの多いロック (1632-1704) とルソーの影響を投影することはたやすい。だが複数の先行研究で疑問視される通り、ロマン派詩人たちの教育思想は必ずしもルソーの影響を強く受けているとはいえない。特に『抒情詩集』の出版期間と前後して、コールリッジがルソーの消極教育思想に対して批判を繰り返していること、ロマン派詩人たちが国内の教育におけるモニトリアル・システムの導入に関し活発に発言していたことは注目に値する。また同時期の教訓派作家たちの側にも決してロマン派詩人の対極に置き得ない思想が見出される。

本稿の目的は、これらの疑問点をふまえて教訓派とロマン派の教育思想を再考し、両者が単純な二項対立図式に収まらない複雑な関係にあることを明らかにすることである。中心に扱うのはコールリッジによるルソー批判とモニトリアル・システムの支持に関する教育思想であり、比較対象として教訓派作家のうち特にコールリッジと直接的な交流があったバーボールド、およびロマン派詩人たちと同じくモニトリアル・システム支持を主張したトリマーを取り上げ、さらにバーボールドとコールリッジに対する19世紀の道徳哲学の影響を検討する。

1 先行研究にみる教訓派とロマン派の対立

前述のように教訓派とロマン派の教育思想の解釈には、子どもを道徳的な教訓話で教化しようとする女性作家と、自然や無垢の喜びを歌い、おとぎ話の想像力を守ろうとする男性詩人という二項対立図式の理解が存在する。

女性作家たちの作品と教育思想の基礎にあるとされるのが『教育に関する考察』(1693)に代表されるロックの教育論である。ピカリングによれば、バーボールドは「ロックの著

作を織り交ぜたモルタルによって知識のレンガを積み上げた」ことで同時代の教育者たちに支持され、教化の意図をもって子どもの人格形成にロックの観念連合論を適用したという⁴。またリチャードソンは教訓派作家が牽引した英国の黎明期の児童文学作品が、ロックの教育思想を基盤として家庭における子どもの教化に活用されたと指摘する⁵。

教訓派におけるロックの影響に対し、ロマン派にはルソーの影響がたびたび指摘される。ロマン派の「感性と想像力」の子どものイメージを『エミール』と結びつけ、「理性」を重んじその教育を求める社会的風潮に対する「感性」の復権を主張したカヴニーがおり⁶、『ロマン派時代事典』などでもワーズワース兄妹の教育方法に対するルソーの影響を指摘され⁷、ロマン派詩人がルソーの影響によって「子ども時代を崇高な無垢の状態」として作品に描いたとされる⁸。また近年でもニューリンがワーズワースの理想の教育論はルソーから借用されたと主張している⁹。

さらに両者の「教化対想像力」の対立は、ロックとルソーの思想的影響が投影され、「教育対反教育」の対立としても解釈される。古くは教訓派には言及しないもののレノルズ(1723-1792)やロックに反発するブレイクの芸術教育思想が「啓蒙主義から見れば反教育思想」であるとするイーヴス¹⁰、ワーズワースの『序曲』が同時代の「教育コントロール」に抗い子どもの自由を鼓舞しているというギル¹¹、子どもの本を「矯正という目的」をもって教育のツールと見なした教訓派に対し、ロマン派は自身の子どもの時代を描いてファンタジーの価値を高めようとしたと考えるボトムズがいる¹²。またリチャードソンはロックとルソーの双方の影響による教訓派の「道徳的教化主義」と、ロマン派による「想像力のおとぎ話」という「絶対的な対立」を指摘し¹³、ごく最近では「教訓対想像力、教化対喜び、理性対ファンタジー」という「二つの対立」を見るグレイなどが¹⁴、「教化対想像力」から「教育対反教育」の二項対立を引き出してい

ると考えられる。

以上のように先行研究を概観すると、教訓派の「教化」や「教育」との対比において、ルソーの消極教育思想の影響を根拠としてロマン派に「反教育」という社会化の否定が見出されていることがわかる。しかしここで問題となるのが、はじめに述べたコールリッジによるルソーの消極教育思想批判と、1800年前後のロマン派詩人たちによるベル(1753-1832)のマドラス・システムに対する支持の表明である。特にベルが考案したこの新しい教育システム(モニトリアル・システム)については、コールリッジが「大いなるモラル・スチーム・エンジン」と呼び、ワーズワースが「驚くべき効果をもたらす」と称賛し、サウジー(1774-1843)がベルの評伝を編纂に取り組むなど¹⁵、活発な発言や雑誌への寄稿が見られる。同時代の教育に対するこうした態度からロマン派に社会化の否定や反教育の思想を読み取るのは困難である。

加えて、ファンタジーとの対比で女性作家を子どもの抑圧者のように考える傾向を早くから問題視したマイヤーズの指摘も無視できない¹⁶。マッカーシーは教訓派とロマン派を対比的に考える「シンプルな二元論」は、マイヤーズの問題意識に立ち戻って再考される必要があると指摘し¹⁷、この指摘を受けてジェイソンも「教育者」と「ロマン派詩人」のカテゴライズや「二元的なフレームワーク」を見直している¹⁸。ここで問題視されているのはロマン派詩人と比較した後世の知名度による教訓派作家の過小評価である。この点がかつてクラークによっても「呪われた一味」というラムの発言が、ロマン派期の児童文学を教化と遊び、道徳性と楽しみ、現実の世界とファンタジーといった、いわば対置で説明づける傾向を生み出し、結果的に後世における女性作家たちの評価がわかりづらくなると指摘された¹⁹。むろん現在ではメラ、ヒルトン、メジャーらの研究によって女性作家の再評価が進み²⁰、バーボールドについては1800年当時の評価がコールリッジやワーズワ

ス、ブレイクを凌ぐものであり、詩人として若き日のコールリッジにも影響を与えたことが明らかにされ、最新の研究動向を収めた研究書も出版された²¹。しかしこれらの動向にも関わらず、近年の研究において「教化対想像力」「教育対反教育」の二元的フレームワークが見られることも事実である。教訓派の評価の固定化は、同時にロマン派の「子どもの解放者」としての評価も固定化することになる。そしてこうした固定化こそが、ロマン派の子ども観と教育思想をめぐる解釈の矛盾を生み出していると考えられる。

この問題に対し本稿では、教訓派とロマン派の理解に見られる「シンプルな二元論」を見直していくことで、女性作家を「子どもの抑圧者」という狭小化されたカテゴリに収めることを避け、同時に「子どもの解放者」たるロマン派詩人につきまとう「社会化の否定」の理解に新たな可能性を提示してみたい。そこでまずロマン派に対するルソーの思想的影響とモニトリアル・システムの支持を検討し、教訓派とロマン派の共通点を見出していくことで両者の教育思想における「二元論的なフレームワーク」を再考する。そのうえでモラルと宗教の教育に関する道徳哲学の影響から、両者の子ども観と教育思想を新たな思想的分布図に配置し直すこととしたい。

2 ロマン派におけるルソーの影響とコールリッジの消極教育思想批判

「教育対反教育」という教訓派とロマン派の二項対立は、両者の教育思想にロックとルソーの影響が明らかであるがゆえに成立するといえる。だが教訓派に対するロックの影響と比べ、ルソーがロマン派に影響を持ったことを証明することは容易ではない。ブレイクがルソーに言及するのはヴォルテール（1764–1778）との対比、すなわち政治思想についてであり、教育思想や子ども観ではない²²。『序曲』に「ドワーフ・マン」のような教育の風刺が見られることは確かだが、ワーズワースが『エミール』を読んでいたかは研究者の間

で意見が分かれている²³。また近年では『序曲』をルソーの教育思想に対する風刺と考える研究もある²⁴。ロマン派に対するルソーの直接的影響は証明できないが、『抒情詩集』や『序曲』が『エミール』と「同時代に発表されたこと」に意味を見いだそうというハルピンの主張はこの困難を端的に表している²⁵。

そして注目されるのがコールリッジによるルソーの消極教育思想に関する批判的な言及である。なおルソーの消極教育思想とは、『エミール』における「初期の教育はだから純粋に消極的でなければならない」²⁶ という言葉に代表されるように、子どもの発達の初期段階では大人が積極的、恣意的に教え込むことを避け、子どもの判断力の成熟や適切な時期を待って教育すべきであるという思想である。

ロマン派詩人たちの友人に急進主義の政治思想家で詩人であったセルウォール（1764–1834）がいる。1830年7月24日のテーブルトークでは、子どもが「思慮を身につけ、それ自体について選択が出来る年齢になるまでは」大人側の意見を教え込むべきではないと考えていたセルウォールを、コールリッジが雑草だらけの荒れた庭に案内したエピソードが紹介されている。庭の雑草に驚く友人の問いかけに、彼はルソーへの皮肉を交えて応じたという²⁷。このエピソードは遡ると1813年および1808年の講演でも言及され、講演記録によるとコールリッジは消極教育を擁護する友人を放置された庭に案内して「ルソーの原理に従って教育された庭に過ぎない」と皮肉を述べたとされている²⁸。

コールリッジはこの出来事があったのは1797年のことだと1818年11月19日のローズ宛の手紙で述べており、この手紙でも雑草で荒れた庭を見咎めるセルウォールにコールリッジは、「ルソーのやり方に厳密に従って教育し、あらゆる人為的な種蒔きから遠ざけようとしただけ」²⁹ だと返答したと綴られている。「人為的な種蒔き」から遠ざけることが、庭すなわち子どもの精神の荒廃（「雑草だらけ

の庭)を招くという、ルソーの消極教育思想に対する痛烈な皮肉である。

これらの記述を見る限り、少なくとも1797年から1830年までの長期間、コールリッジは消極教育に関するルソーの思想に対して否定的な考えを持っていたと考えられる。この期間は『抒情詩集』や『序曲』の出版時期と一致するとともに、バーボールドやトリマーが当時英国でロックに匹敵する影響力をもったルソーの教育論に対して強い警戒感を抱いていた時期と重なっている。

たとえばバーボールドはルソーの影響力を意識して一定の評価をしつつも、1798年の小論「教育とは何か」で「ルソーやジャンリス夫人(1746-1830)とともに一人の子どもの教育に身を捧げる必要はない」³⁰と批判し、1800年3月の「先入観について」でも、生まれたときから周りに存在する無数の先入観から子どもを完全に遠ざけて養育・教育することは不可能であり、「もっともばかげた仮説」であると述べてルソーの消極教育思想を否定的に見ている³¹。同様にトリマーも雑誌『教育の守護者』(1802-6)で「この国の子どもが受けたかつてない大きな危害はルソーの学説の紹介によるもの」と主張する³²。

英国の知識人・文化人に見られる1800年前後のこうしたルソー批判は、フランス革命とジャコバン主義の動向に対する警戒感と無縁ではないだろう。英国におけるルソーの思想的影響は政治思想や宗教思想を含めた広い視点から考える必要があり、『エミール』と教育思想のみを切り離して考えることはできない。またこの時期のコールリッジが急進主義を批判し、信仰上の転向と連動して政治思想を変容させる過程で、ルソーとジャコバン主義の思想を「理性の本質を損なう」と批判的に考えていたというキットソンの指摘も重要である³³。以上からコールリッジの教育思想にルソーの消極教育思想に基づく社会化の否定を見出すことは困難であり、むしろルソーの批判においてバーボールドやトリマーとの共通点が見出されると考えられる。

3 モニトリアル・システムとロマン派詩人

前節では教訓派作家のみならずコールリッジもルソーの消極教育思想に批判的な態度を取り続けたことを明らかにしたが、これはコールリッジが同時代の教育に無関心であったことを意味するものではない。ルソーの批判を繰り返していた同時期に、コールリッジや他のロマン派詩人たちは英国の学校教育制度に対する重要な発言を残している。

周知の通り19世紀の英国において、国の教育を支えるシステムをめぐる教育者や政治家、文化人らが議論を戦わせた「ベル=ランカスター論争」は、急速に普及したランカスター(1778-1838)のモニトリアル・システムに対するトリマーの批判から始まった。トリマーは1805年9月24日付のベル宛の手紙で、ランカスターの教育システムには「国教会の利益にとって好ましからざる何か」があると指摘する³⁴。続いてボウルズ(1751-1819)が1807年の教区学校法案にランカスターの教育システム導入を盛り込んだ議員ホイットブレッッド(1764-1815)に公開書簡を送り、システムの機能的な側面は高く評価しながらも、ランカスターの方式による宗教教育は画一的、統一的であり、様々な宗派が存在する英国では個人の信仰の自由を阻害すると主張する³⁵。

ランカスターのシステムに危惧を抱く人々が対抗策として持ち出したのがベルによるマドラス・システムである。トリマーはその急先鋒であり、画期的なシステムを先に開発したのはベルであって、ベルこそが国教会の掲げる「真のキリスト教」の教育を実現してくれると主張する³⁶。また『新しい学校』(1809)でバーナード(1750-1818)は「ベル博士の新しい教育方法」である「ニュー・システム」が従来の「オールド・システム」の欠点を凌駕すると称賛する³⁷。

上記の論争はやがてベルとランカスター当人の直接対決へと発展していくが、この過程で様々な発表されるベルへの賛辞は、当時のロマン派詩人たちにも共有されていた。たとえばコールリッジはバーナードが設立した王

立研究所で行った1808年のシリーズ講演をはじめ、1813年の講演、『フレンド』(1809-10)、『省察の助け』(1825)、『教会と国家の構成原理』(1829)等の様々な論考で、時にベルの言葉を引用しながら宗教とモラルに関する教育の重要性や国教会の役割を論じている³⁸。サウジーは『新しい教育システムの起源、本質とその目的』(1812)で全篇に渡りベルの発明をバーナードと同様に「ニュー・システム」と呼び³⁹、ワーズワースは『逍遙』(1814)の注釈でベルの「スチーム・エンジン」によって「人類にもたらされる利益」⁴⁰は確実なものであると讃える。称賛としての「スチーム・エンジン」の話には蒸気機関に匹敵する優れた発明の意があると推測されるが、1816年のコールリッジによる『ステイツマンズ・マニュアル』での「モラル・スチーム・エンジン」⁴¹、同年のサウジーによる『クォーターリー・レビュー』での「ベル博士による知識のスチーム・エンジン」⁴²など、折に触れて繰り返し使用されている。

『エミール』に影響されて子どもの無垢を描いたとされる詩人たちがベルと体制側の教育を支持したことは、ロマン派研究でたびたび争点となってきた。コールリッジの全集編纂者であるフォークスは、詩人たちがモントリアル・システムの普及が児童労働を生み出す奴隷貿易の廃止等につながると考えた可能性と、詩人たちを含む「ベル=ランカスター論争」に関わった人々が、新しいシステムのもつ「イデオロギー」の問題点に無自覚だった可能性を指摘する⁴³。またフォークスを受けたリチャードソンは、当時の詩人たちの意図は国教会の擁護にあったと指摘しつつも、1845年頃までにワーズワースがシステムの支持をやめて「自然」に関心を引き戻したことから、ロマン派詩人のシステムの支持は限定的で、その思想には同時代の教育に対する激しい批判が潜在していたと考えた⁴⁴。

だが『抒情詩集』は1798年、1800年、1802年と重版になり、『序曲』は1805年が初版、「子どもは大人の父」の一節も含まれる「幼

年時代を回顧して霊魂の不滅を識るオード」は1807年、『逍遙』は1814年の発表である。つまりロマン派の子どもを主題とする重要作品の制作・発表期と、ベルの影響を受けた教育論が展開される時期はほぼ一致する。また前節で検討した通り1800年前後から1830年まではコールリッジの消極教育思想批判が続いていた時期でもある。1845年以降のワーズワースの動向をもってロマン派詩人たちが限定的に思想の逸脱を見せたと考えることは、やはり難しいのではないだろうか⁴⁵。

この矛盾に対し、ハートマンやリードは社会化や教育はむしろロマン派詩人の中心的・継続的関心事であり、後代の教育にも影響を与えたと考える⁴⁶。またヒッキーもワーズワースの『序曲』と『逍遙』の二つの長編に貫かれる主題が人間の精神的成長にあるとし、ベルのマドラス・システムに対する継続的関心はロマン派が重視した想像力や人間性というテーマからの「転向」を示す事例ではないと結論づけている⁴⁷。また経済学の視点からコールリッジが教育政策に継続して関わろうとしたとするコンネルは、1808年の講演でコールリッジがマルサス(1766-1834)とランカスターを厳しく批判したことは、国教会を攻撃するマルサスやホイットブレッドをコールリッジが警戒し、国教会を擁護することが目的だったという⁴⁸。

上記を総合して考えられるのは、教育政策によってランカスターらが勢いづき、宗教教育における国教会の地位が揺らぐことを阻止し、公教育制度における国教会の主導権を確保したい国教会派の知識人、文化人たちの政治的位置取りの可能性である。すなわち国教会主導による宗教的モラルの教育の確立は、ラムが嘆いた「書棚からおとぎ話が追いやられてしまう状況」を超えて、トリマーとコールリッジ、教訓派とロマン派を結びつける共通の危機意識を喚起したと考えられる⁴⁹。

4 バーボールドの教育思想と観念連合

ここまで教訓派とロマン派にはロック、ル

ソーの影響に基づく「教育対反教育」の対立があるとは考えにくく、またモニトリアル・システムの支持という点でも両者に共通する見解があることを見てきた。ロマン派がベルのマドラス・システムを支持したことの背景には、トリマーやバーナードと同様の宗教教育、モラル教育における国教会の擁護がある。本稿ではこれに加えて、バーボールドとコールリッジの論争に着目し、同時代の道徳哲学の思想的影響について検討したい。

1832年3月31日付のテーブルトークによると、コールリッジはかつてバーボールドから代表作の「老水夫行」について「素晴らしい作品だが『非現実的であること』と『モラルに欠けること』という二つの欠点がある」との批判を受けたという。そしてこの批判にコールリッジは、作品が「非現実的」であることはいくつかの点から認めるとしたうえで、「モラル」の欠如に関しては、むしろ「純粋な想像力によってなる作品」において「道徳感情が行為の原理、行為の根拠として影響力を発揮しすぎる」ことが「老水夫行」の「唯一かつ主な欠点だ」と反論する⁵⁰。

ここで留意したいのが、コールリッジが教育論、すなわち反教育の立場からではなく、バーボールドの論点が「想像力」と「道徳感情」にあると理解したうえで「モラル」を主題とした反論を展開している点である⁵¹。この点からバーボールドとコールリッジの議論の背景に、19世紀の英国における道徳哲学、特に功利主義と直観主義による観念連合と直観という二つの思想的潮流があったと考えられないだろうか。

道徳哲学の第一の潮流は道徳的判断が観察による学習と状況に応じた判断から成立すると考える功利主義の立場であり、J. ミル (1773-1836) やペイリー (1743-1805)、ベンサム (1748-1832)、J. S. ミル (1806-1873) らが代表的である。これらの思想の出発点にはロックがいるが、ロックの生得観念否定論と観念連合論はその後ハートリ (1705-1757) によって発展し、18世紀の教育者たちに影響

を与えていった⁵²。教育思想と観念連合論は一見すると関連が薄いようにも考えられる。しかし一般に観念連合とは、ある観念が記憶に蓄積された別の観念を想起させること、あるいはそれらの観念が複合的に結びついて連想が成立することを指す。そして児玉聡も指摘する通り、ロックからハートリに続く観念連合論は、観念の生得性を否定し、道徳感情を後天的に獲得できる複合的な観念と考えていける点で、教育者たちにとっては有利な議論であった⁵³。

本節ではまずバーボールドの教育思想に対する観念連合論の影響が見られるかを検討する。バーボールドには文学は想像力で感性を増幅させるより、道徳的な行為そのものに価値を置くべきであるという持論があった⁵⁴。『子どものための散文による賛美歌集』の序文でも、「神の観念の全き力」を感じることに、「知覚するものすべてを宗教と結びつけ」、「敬虔な感情」をできるだけ早い時期に「幼い子どもの精神に刻みつける」ことの重要性が強調されている⁵⁵。

マッカーシーやインクスターは、バーボールドが父や兄、プリーストリ (1733-1804) を介してロックやハートリの思想に親しみ、子どもに宗教的モラルを教えるにあたってその観念連合論を作品の中にも適用したと考えている⁵⁶。この点を1800年3月に『マンズリー・マガジン』に掲載された「先入観について」を中心に検討してみたい。この論考はバーク (1729-1797) やルソーの思想に批判的に言及しながら、知性の形成における「先入観」の影響を論じたものである。

バーボールドはまず、子どもに先入観を与えてはならず、意見の基礎は理性のみに拠らなければならない、という「聞こえの良い金言」に対し疑義を差し挟み、先入観とはすなわち「予断 (pre-judging)」なのだと言主張する⁵⁷。なお、ここでの先入観は、判断を誤らせる偏見というより、むしろ複雑な推論や深い省察が行われる前のシンプルな観念として位置づけられている。次にバーボールドは

「理性的な子どもはまだ理性的な存在であるわけではない」として子どもが理性を有するだけでは不十分であり、理性をどのように扱うか、すなわち、「その力、限界、活用」を教えなくてはならないと主張する⁵⁸。

そして議論は「理性の扱い方」を成り立たせる推論の力、すなわち観念連合に向けられる。バーボールドは、子どもは周囲の環境や両親の嗜好などから様々な事柄を吸収し、それらを観念連合によって組み合わせることを構築するのであり⁵⁹、「適切な推論の帰結」の大半が「教育や気質、その子どもが生きる時代、そしていくつかの偶発的な観念連合を通じて特定の軌跡を指し示す一連の思想」⁶⁰によって形成されるとして、子どもの養育・教育において観念連合が占める役割を論じている。そしてこうした観念連合の重要性は、1783年の『子どものための散文による賛美歌集』の序文においてもすでに語られていた。

(中略) 深遠で、力強く、永続する観念連合によって、将来の生活に有用な信心に向けたいちばんの基礎をつくるのです⁶¹。

以上からバーボールドの教育思想には観念連合論が背景にあることは明らかである。

5 コールリッジの教育思想と直観

道徳哲学の第二の潮流は道徳的判断において善悪の観念が本性的、生得的であるとする直観主義の立場であり、リード(1710-1796)らスコットランド学派およびケンブリッジ・モラリストたちがこれにあたる。ロックリッジや児玉聡によると、ケンブリッジ・モラリストがドイツ観念論から影響を受けた背景に、コールリッジによって英国に紹介されたカント(1724-1804)やシェリング(1775-1854)の存在があるという⁶²。

だがコールリッジははじめから直観主義の立場を採っていた訳ではなく、むしろ息子にその名をつけるほどハートリの思想に傾倒していたことは周知の事実である。コールリッ

ジがハートリの観念連合論に親しんでいたのはバーボールドとほぼ同時期であり、両者に共通して介在するのがプリーストリの政治思想とユニタリアニズムである。コールリッジに変化が見られるのは1800年代に入ってからであり、1803年8月7日付のサウジー宛の手紙で、ハートリの観念連合論はその「体系が揺らいでいる」との疑念を記している⁶³。

ロックリッジの指摘によれば、コールリッジはハートリの観念連合論と決別したのちに、人格形成における善の育成を論じる中で直観主義の思想を構築していった⁶⁴。この背景にはハートリに加えプリーストリの政治思想とゴドウィン(1756-1836)の急進主義に対しても疑念が生じていたこと⁶⁵、あるいは講演や雑誌の論考を通じて時代の文芸評論を牽引したコールリッジが、自身の想像力論、すなわち内的感情を表現する想像力の機能に関わる理論を、ドイツ観念論を借りて構築していった経緯が存在すると考えられる⁶⁶。

本稿にとって重要なのは、コールリッジの直観主義が人格形成論、すなわち教育思想と連動して構築されている点である。教育を論じた1826年10月22日のギルマン宛の手紙は、知識を成立させる原理や法則が精神の内面から「引き出される」例として、幾何学における「直観の力」に触れており、教育と関連づけて直観を論じたものと考えられる⁶⁷。

ではコールリッジのなかで直観主義、すなわち道徳判断における直観と教育はいかにして結びつくのだろうか。『フレンド』ではベルの言葉を引用しながら「教育」が次のように定義されている。

それ(引用者注:教育)は引き出すことにある。あるいは、ベル博士自身の表現を借用するなら、人間精神の能力を引き出すことであり、そして同時にそれらを理性と意識に従わせることである⁶⁸。

ヘッドレイは、コールリッジにとって教育は「外部から精神に対して因果律の様式を刻

みつける」ものではなく、目に見えない信仰を通して人間を育成することであったとしている⁶⁹。またコンネルはコールリッジが教育を「引き出すこと」と定義づけたのは、教育を「道徳的、精神的な育成のプロセス」として再定義することがねらいだったという⁷⁰。

生得観念の否定を根拠として成立する観念連合論に対し、直観主義は善の知識や道徳感情を生得的、本性的であると見なす。この場合、道徳的判断は理性による推論すなわち観念連合ではなく、生得観念として備わる善に照らして直接的に、つまり直観によって得られる。コールリッジにとってモラルとは、生得観念のない精神に教育によって刻みつけるものではなく、人間に生得的に備わる「精神の能力」である。そしてこれを引き出し、「理性と意識に従わせる」のがコールリッジの考える教育という営みである。

先の引用に見る通りこの「引き出す」営みとしての教育は、1807年のベルの著作から言葉を借りて定義づけられる⁷¹。『フレンド』でコールリッジはベルのシステムによって「最も徳ある有用な道徳的人格が呼び覚まされ、発達し、習慣へと形づくられる」と述べる⁷²。また『ステイツマンズ・マニュアル』では教育は「能力を引き出し、習慣を形成する」ことから成るとし、ランカスターの教育についてははっきりと批判し、ベルのプランにも不十分な点があり国の教育をすべて委ねることは問題視しつつも、そのシステムを「人類に対する神意の特別な賜物」、「比類なき装置」と称賛する⁷³。さらに『教会と国家の構成原理』では「引き出す」というベルの言葉を用いながら「国の教育」における国教会の役割と目的を論じ、モラルと宗教の教育における国教会の主導性を明確にしようとしている⁷⁴。

以上本節と前節において、バーボールドの教育思想に功利主義の観念連合論の影響が見られること、対してコールリッジには観念連合論を乗り越えようと模索した末の直観主義が見られることが明らかになった。両者には、モラルと宗教の教育に対する関心という点で

共通点が見られるが、道徳的判断における想像力の解釈においては、観念連合と直観という思想的相違が見られると考えられる。

おわりに

子ども観と教育思想において二項対立図式で理解されてきた教訓派とロマン派について再検討した結果、ルソーの消極教育思想についてはバーボールドやトリマーとコールリッジに共通して批判的な態度が見られ、ベルのモニトリアル・システムに関しては、公教育におけるランカスターのシステム導入に対する警戒感という点で、国教徒としてのトリマーとコールリッジの主張に一致が見られた。したがって両者には女性作家と男性詩人による「教化対想像力」や「教育対反教育」の明確な対立は見出されないと考えられる。

また19世紀の道徳哲学の動向をふまえて分析した場合、一方のバーボールドにはロックからハートリへと貫かれる功利主義の観念連合論の影響がある。なお観念連合の影響はトリマーにも見られることが岩下誠によって指摘されており⁷⁵、同時代の教育論と教訓派に共通する特徴であったと考えられる。また、他方のコールリッジにはハートリの観念連合論を乗り越えようと模索した末の直観主義があり、ベルの「教育とは引き出すこと」という言葉を経て、生得的な善を「引き出す」教育の定義へと展開する思想が見られる。さらにバーボールドとコールリッジには道徳感情に基づく善悪の判断、すなわち道徳的判断力としての想像力を観念連合として考えるか、直観として考えるかにおいて、ハートリを間に置いた思想的相違が存在する。

以上の考察から教訓派とロマン派について次のような結論が導き出される。まず教訓派の教育思想を子どもに対する抑圧や教訓の押しつけではなく、功利主義哲学を背景に置いた合理的判断力や想像力の育成を目指す教育の模索として考えることが可能となる。観念連合が道徳的判断における推論の力としての「想像力」であることを思い起こせば、教訓

派の目的が「教化」による子どもの「想像力」の抑圧ではなく、観念連合による判断力の育成と人間形成にあったことは明らかである。

次いで、ロマン派の思想が単純に「反教育」や「社会化の否定」と解釈されてしまう傾向を抑止できる。直観主義の立場から道徳感情の生得性を訴え、「引き出す」ことを鍵としてモラルと宗教の教育を論じる詩人たちに見られるのは、反教育や社会化の否定というよりも、むしろ教会と国家をつなぐ国の教育制度のうちに子どもの精神的成熟を引き出す仕組みをつくらうとする教育への積極的な参画である。

教訓派とロマン派の間に見られるのは、ロックとルソーの二元的フレームワークを背景とした教化による想像力の抑圧とそれに対する抵抗、あるいは教育に対する社会化の否定という、「教化対想像力」「教育対反教育」の二項対立ではない。フランス革命の影響や国教徒と非国教徒の複雑な関係、政治思想と宗教をめぐる道徳哲学の動向を背景に置きながらも、両者には一貫して子どもたちに対するモラルの教育、宗教の教育の重視という共通点が見られる。これらは、産業社会の経済発展による中産階級の勃興を背景として、同時代の市民社会を支える新たな道徳的価値に基づく人格の形成・市民の育成における切迫した課題でもあった。ここにあるのは、激しい社会変動に直面して次世代の「モラル」と「宗教」の育成を国全体の重要な課題として共有し、時に対立し、時に政治動向とも対峙しながら、英国の知識人・文化人が醸成してきた多様な教育思想なのである。

ただしその後のモニトリアル・システムが迎える展開や限界は史実に明らかであり、その歴史に教訓派、ロマン派がそれぞれどのように関わったのかについては検討すべき問題が多く残される。特にロック、ハートリと続く観念連合論に基づく教育思想に、ロマン派による感性重視や直観主義が部分的に重なったことが後代の教育に与えた影響についてはさらなる考察が必要であり、次なる研究課題と

考えている。

注

¹ 近年バーボールドは文学史上初期ロマン派として位置づけられると考えられるが、本稿ではクラークが 'romantic' に対し使用する 'didactic' と (Norma Clark, "THE CURSED BARBAULD CREW": Women Writers and Writing for Children in the Late Eighteenth Century', *Opening the Nursery Door: Reading, Writing and Childhood 1600-1900*, ed. by Mary Hilton, Morag Styles, Victor Watson, Routledge, 1997, p.91.)、森田伸子 (森田伸子、「<子どもの本>と<教育的なるもの>をめぐる一過渡期としての18世紀—」、『近代教育フォーラム』、No. 16、2007年、111-119頁) に依拠し「教訓派」と呼ぶ。

² C. K. Jones, *Encyclopedia of the Romantic Era 1760-1850*, ed. C.J. Murray, Routledge, 2004, p.180.

³ Charles Lamb, *The Works of Charles Lamb*, Vol. I, II, New York: Thomas Y. Crowell, 744 Broadway, 1885, pp.182-5.

⁴ Samuel F. Pickering Jr., *John Locke and Children's Books in Eighteenth-Century England*, Univ. of Tennessee Press, 1982, pp.146-9.

⁵ Alan Richardson, *Literature, Education and Romanticism, Reading as Social Practice 1780-1832*, Cambridge University Press, 1994, p.109-110.

⁶ ピーター・カヴニー、『子どものイメージ』、江河徹監訳、紀伊国屋書店、1979年、30-46頁。

⁷ C.K. Jones, op.cit., p.180.

⁸ M.O. Grenby, *Encyclopedia of the Romantic Era 1760-1850*, op.cit., p.182.

⁹ Lucy Newlyn, *The Cambridge Companion to Wordsworth*, ed. by Stephen Gill, Cambridge University Press, 2003, pp.60-61, Lucy Newlyn, *William and Dorothy Wordsworth: 'All in Each Other'*, Oxford University Press, 2013, p.52.

¹⁰ Morris Eaves, *William Blake's Theory of Art*, Princeton University Press, 1982, p.98.

¹¹ Stephen Gill, *William Wordsworth: The Prelude*, Cambridge University Press, 1991, p.66.

¹² Janet Bottoms, "The Battle of the (Children's) Books", *Romanticism*, Volume 12, Number 3, 2006,

pp.213-7.

¹³ Richardson, op.cit., pp.112-8.

¹⁴ William Gray, *Fantasy, Art and Life: Essays on George Macdonald, Robert Louis Stevenson and Other Fantasy Writers*, Cambridge Scholars Publishing, 2011, p.32.

¹⁵ *The Life of Rev. Andrew Bell*, ed. by Robert Southey and Charles Southey, John Murray, London, William Blackwood & Sons, Edinburgh, 1844.

¹⁶ Mitzi Myers, "Impeccable Governesses, Rational Dames, and Moral Mothers: Mary Wollstoncraft and the Female Tradition in Georgian Children's Books", *Children's Literature*, vol.14, 1986, pp.31-5., Mitzi Myers, "Socializing Rosamond: Educational Ideology and Fictional Form", *Children's Literature Association Quarterly*, Vol. 14, No.2, Summer, 1989, p.52.

¹⁷ William McCarthy, 'Mothers of All Discourses: Anna Barbauld's Lessons for Children', *Culturing the Child, 1690-1914: Essays in Memory of Mitzi Myers*, ed. by Donelle Ruwe, The Scarecrow Press, INC., 2005, pp.86-8.

¹⁸ Anne Jamison, "Children's Susceptible Minds: Alicia Lefanu and the "Reasoned Imagination" in Georgian Children's Literature", *Studies in Romanticism*, vol.52, no.4, 2013, pp.585-6.

¹⁹ Clark, op.cit., pp.91-2, p.99

²⁰ Anne K. Mellor, *Literary Criticism, Cultural Authority, and the Rise of the Novel, Mothers of the Nation: Woman's Political Writing in England, 1780-1830*, Indiana University Press, 2000, Mary Hilton, *Women and the Shaping of the Nation's Young: Education and Public Doctrine in Britain 1750-1850*, Ashgate Publishing Company, 2007, Emma Major, *Madam Britannia: Woman, Church, & Nation, 1712-1812*, Oxford University Press, 2012

²¹ W. McCarthy and E. Kraft ed., *Anna Letitia Barbauld: Selected Poetry & Prose*, Broadview Press Ltd., 2002, p.11, pp.27-32, William McCarthy & Olivia Murphy ed., *Anna Letitia Barbauld: New Perspective*, Bucknell University Press, 2014.

²² William Blake, *The Complete Poetry & Prose of William Blake*, ed. D. V. Erdman, Doubleday, newly

rev., 1988, p.68, p.117, p.141, pp.201-203, p.218, p.298, p.477, p.595.

²³ Aubrey Rosenberg, 'Rousseau's *Emile*: The Nature and Purpose of Education', *The Educational Legacy of Romanticism*, ed. J. Willinsky, Wilfrid Laurier University Press, 1990, pp.11-12.

²⁴ Peter Newbon, Wordsworth, Child Psychology, and the Growth of the Mind, *The Oxford Handbook of William Wordsworth*, ed. by R. Gravil and D. Robinson, Oxford University Press, 2015, p.718. またかつて同様の可能性を論じた研究として、James K. Chandler, *Wordsworth's Second Nature: A Study of the Poetry and Politics*, The University of Chicago Press, 1984, pp.93-119.

²⁵ David Halpin, *Romanticism and Education: Love, Heroism and Imagination in Pedagogy*, Continuum International Publishing Group, New York, 2007, p.44.

²⁶ J. J. ルソー、『エミール』、上巻、今野一雄訳、岩波文庫、1962年、132-133頁。

²⁷ Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, Table Talk I, ed. C. Woodring, Princeton University Press, 1990, p.181.

²⁸ Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, Lectures 1808-1819 on Literature I, ed. R.A. Foakes, Princeton University Press, 1990, p.106, p.586.

²⁹ Coleridge, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, in 6 vols, Clarendon, 1956-71, vol. IV, 1959, pp.879-880.

³⁰ Barbauld, *Anna Letitia Barbauld: Selected Poetry & Prose*, ed. by W. McCarthy and E. Kraft, Broadview Press Ltd., 2002, p.330.

³¹ Ibid., pp.337-8

³² Sarah Trimmer, *The Guardian of Education: A Periodical Work*, Vol.1, Thoemmes Press, 2002, p.10.

³³ Peter J. Kitson, 'Political thinker', *The Cambridge Companion to Coleridge*, ed. Lucy Newlyn, Cambridge University Press, 2002, pp.164-5.

³⁴ 1805年9月24日のトリマーによるベル宛の手紙より。Sarah Trimmer, in *The Life of Rev. Andrew Bell*, ed. by Robert Southey and Charles Southey, John Murray, London, William Blackwood & Sons,

Edinburgh, vol. II, 1844, pp.131-2. またトリマーのランカスター批判は岩下誠、「モニトリアル・システムの条件と限界—サラ・トリマーの教育思想と教育実践を通じて—」、『教育学研究』、第73巻、第1号、2006年、28-30頁も参照。

³⁵ John Bowles, *A Letter addressed to Samuel Whitbread, ESQ. M.P.*, London, Printed for J. Hatchard, Piccadilly, 1807, pp.1-6.

³⁶ 1805年10月1日のトリマーによるベル宛の手紙より。Trimmer, in *The Life of Rev. Andrew Bell*, op.cit., pp.135-141.

³⁷ Thomas Bernard, *The New School*, Co-published in 1994, Thoemmes Press, 1809.

³⁸ 王立研究所は1799年にバーナードとベンジャミン・トンブソン(1753-1814)が設立。なおバーナードとコールリッジのベルへの支持はシャッフアーに詳しい。Simon Schaffer, 'How Disciplines Look', *Inter-disciplinarity: Reconfigurations of the Social and Natural Science*, ed. A. Barry & G. Born, Routledge, 2013, pp.64-75.

³⁹ Robert Southey, *The Origin, Nature and Object of the New System of Education*, London:Printed for John Murray, 32, Fleet-Street: W.Blackwood, Edinburgh; and J. Cumming, Dublin, 1812.

⁴⁰ William Wordsworth, *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. 5, The Excursion, ed. E. de Selincourt, and Helen Darbishire, Oxford at the Clarendon Press, 1949, p.473.

⁴¹ Coleridge, *The Statesman's Manual*, London: Gale and Fenner, 1816, p.51.

⁴² Robert Southey, 'The Poor', *Quarterly Review*, London, John Murray, Albemarle Street, 1816, p.227. サウジーのモニトリアル・システムに関する思想及びコールリッジとの比較はダジェットを参照。Tom Duggett, "Southey's 'New System': the monitorial controversy and the making of the 'entire man of letters' ", *Romanticism and Victorianism on the Net*, No.61, April 2012, <http://id.erudit.org/iderudit/1018603ar>.

⁴³ R.A. Foekes, "Thriving Prisoners: Coleridge, Wordsworth and the Child at School", *Studies in Romanticism*, Vol. 28, No. 2, Summer 1989, p.202.

⁴⁴ Richardson, op.cit., p.95, p.104.

⁴⁵ サウジーからベルの全集編纂を引き継いだ息子のチャールズが1844年刊行版の序文で「父の古い友人ワーズワース氏」の助言と協力に謝意を述べ、ワーズワースの関わりを示唆することも無視すべきではない。Charles Southey in *The Life of Rev. Andrew Bell*, op.cit., xi.

⁴⁶ Geoffrey Hartman, *The Unremarkable Wordsworth*, Methuen, 1987, xxvii., Ian Read, "Romantic Ideologies, Educational Practices, and Institutional Formations of English", *Journal of Educational Administration and History*, 28:1, 1996, p.27.

⁴⁷ Alison Hickey, *Impure Conceits: Rhetoric and Ideology in Wordsworth's 'Excursion'*, Stanford University Press, 1997, p.111.

⁴⁸ Philip Connell, *Romanticism, Economics and the Question of 'culture'*, Oxford University Press, 2001, pp. 143-4.

⁴⁹ ここで非国教徒のバーボールドの立ち位置も確認せねばならないだろう。大石和欣やメジャーによればバーボールドはモアら国教会派の教育者とも親交を持ち、作品もトリマーに高く評価され、影響を与えていた(大石和欣、「女性の慈善とバーボールドの曖昧な「公共心」—ユニタリアン文化のジェンダー問題—」、『放送大学研究年報』、第23号、2005年、70頁。Emma Major, "Nature, Nation, and Denomination: Barbauld's Taste for the Public", *ELH*, Vol.74, no.4, Winter 2007, pp.909-911) ことから、モニトリアル・システムをめぐるでも同様に良好な距離を保ったと考えられる。

⁵⁰ Coleridge, Table Talk I, op.cit., pp.270-274

⁵¹ サンドナーもこのエピソードに着目し、バーボールド側に「純粹なる想像力」を、コールリッジ側に「モラル」を見出し、両者の関係が固定的に解釈される傾向を覆そうと試みている。David Sandner, *Critical Discourses of the Fantastic 1712-1831*, Ashgate, 2011, pp.144-145

⁵² Hilton, op.cit., pp.32-34

⁵³ 児玉聡、『功利と直観 英米倫理思想史入門』、勁草書房、2010年、74-76頁。またロックの教育思想と観念連合は岩下誠、「ロックにおける教育可能性に関する一考察」、『近代教育フォーラム』、

No. 13、2004年、247-260頁も参照。

⁵⁴ 「いかなる種類の徳ある考えであっても、適切な遂行が成されることなしにそれらが精神を通過してしまうことほど危険なことはないのです」。Barbauld, op.cit., p.206

⁵⁵ Ibid, p.238

⁵⁶ William McCarthy, *Anna Letitia Barbauld: Voice of the Enlightenment*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2008, p.196, Ian Inkster, "Under the eye of the public': Arthur Aikin (1773-1854), the Dissenting mind and the character of English industrialization", *Religious Dissent and the AikinBarbauld Circle, 1740-1860*, ed. by F. James and I. Inkster, Cambridge University Press, 2012, pp.130-131, pp.139-143

⁵⁷ Barbauld, op.cit., pp.335-6

⁵⁸ Ibid., p.336

⁵⁹ Ibid., p.337-8

⁶⁰ Ibid., p.338

⁶¹ Ibid., p.238

⁶² Laurence S. Lockridge, *The Ethics of Romanticism*, Cambridge University Press, 1989, p.65. 児玉聡、前掲書、65-66頁。

⁶³ Coleridge, *Collected Letters*, op.cit., vol.II, p.961

⁶⁴ Lockridge, op.cit., pp.61-63

⁶⁵ Kitson, op.cit., pp.161-164

⁶⁶ コールリッジの想像力論と宗教的・道徳的な直観の関連はプリケットを参照。Stephen Prickett, *Romanticism and Religion: The Tradition of Coleridge and Wordsworth in the Victorian Church*, Cambridge University Press, 1976, pp.9-33

⁶⁷ Coleridge, *Collected Letters*, op.cit., vol.VI, p.630

⁶⁸ Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, *The Friend*, II, ed. B. E. Rooke, Princeton University Press, 1969, p.288

⁶⁹ Douglas Hedley, *Coleridge, Philosophy and Religion: Aids to Reflection and the Mirror of the Spirit*, Cambridge University Press, 2000, p. 279

⁷⁰ Connel, op.cit., p. 279

⁷¹ Andrew Bell, *The Madras School, or Elements of Tuition: comprising of Analysis of An Experiment in Education made at Male Asylum, Madras, London:*

Printed by T. Bensley, 1807, p.19

⁷² Coleridge, *The Friend*, I, op.cit., p.238

⁷³ Coleridge, *The Statesman's Manual*, op.cit., pp.50-51

⁷⁴ Coleridge, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, *On the Constitution of the Church and State*, ed. J. Colmer, Princeton University Press, 1976, p.44, pp.47-9. なおコールリッジの「教育とは引き出すこと」という定義は、'educate'のラテン語源に関わる用例としてOED(オックスフォード英語辞典)に収められ、後世の教育思想にも影響を与えたと考えられる。これらの経緯は池亀直子・高梨誠、「'educate'の語源解釈におけるイギリス・ロマン主義の思想的影響—S. T. コールリッジによる「教育」の定義とOED—」、『秋田公立美術大学研究紀要』、第2号、2015年、23-37頁に詳しい。

⁷⁵ 岩下誠、「18世紀末のイングランドにおけるモラル・リフォームと教育—サラ・トリマーを事例として—」、『近代教育フォーラム』、No. 16、2007年、101頁